

歴史と文化をふまえた震災復興に関する日本とトルコの比較分析

Comparative analysis on earthquake disaster reconstruction
between Japan and Turkey considering their histories and cultures

吉川 耕司 (YOSHIKAWA Koji)

本研究は、1999年の震災被害を受けたトルコ共和国ドゥズジェ市を対象とした被災と復興に関する学術調査とその分析を、歴史と文化をふまえた領域横断的な見地から行うことで、日本における災害に関わる政策と研究の深化に寄与しようとするものである。具体的には、ドゥズジェ市における震災時および復興過程における政策、被災状況、住民の行動と発想、建築様式や都市形態に関して、既に行った被災直後の調査項目を、復興過程や意識変化・生活状況変化の時系列分析を定量的に行えるように再調査するとともに、地域の歴史の変遷や文化的背景も現地での取り纏めを依頼し、防災・復興制度や住民の行動・意識への歴史・文化的な影響を明らかにしようとしている。これに、日本でのこれまでの研究蓄積を加え、災害に関わる日本とトルコの比較分析の形で取り纏め、歴史と文化をふまえ地域性を重視した防災と復興のあり方を提示することが研究の目的である。

研究活動・作業は、①「市の復興過程と現状の把握」と「市民の被災行動・住民意識と生活・コミュニティの状況の把握」のための現地調査を行い、この分析作業をふまえて②「復興政策と住民意識への文化・歴史の影響のメカニズムの明確化」を行い、最終的には③「日本とトルコの比較分析」の結果として、両国の違いについて対比的に記述した比較リストを作成する、という方針で進めた。

まず、上記の①に関しては、平成28年11月に現地を訪れ調査を行うとともに、市役所とドゥズジェ大学が主催したシンポジウムにおいて調査結果の発表を行い、あわせて同大学との研究交流を行うことができた。ただし、2回の渡航予定のうち1回は、トルコの政治情勢の変化により予定していた訪問を行うことができず、未達の結果となった。

ただしこれまでの調査データの蓄積にこの現地調査結果を加えることで、一定程度のデータを入手することができたので、現地情報の元②の分析を行うこととし、先にこうして分析の手法・方法を確立したうえで今後追加情報を加えて再分析を行うことに方針を転換した。その結果、復興政策の中心が市街地外縁部への新興住宅建設であるといった特徴的な方法に関し、農耕に全面的に頼らない民族性、土着性を重視しない建国の経緯、イスラム教にもとづく相互扶助の精神とそれによるコミュニティ形態が相まって成立可能性を高めているという、文化・歴史の政策への影響に関するメカニズムをかなりの程度、明らかにすることができた。③に関しては、日本での比較対象を、阪神・淡路大震災、中越地震、東日本大震災とし、両国の状況を対比的に記述したうえで、これに文化的・歴史的要因に関する分析を加味して探索的な考察を行っているところである。

以上のように、分野別研究組織としての支援を得ることで、概ね、研究目的を達成し、重要な研究成果をあげることができたことを報告する。